

詩

樹木派

高見順詩集

わが埋葬

死の淵より

重量喪失

補遺

さまざまな角笛

解説

清岡卓行



高見順全集

第十八卷

勁草書房刊

高見順全集 第十八卷

昭和四十五年六月二十五日發行
昭和四十九年二月二十日發行(二回)

著者 高見 順

發行者 井村壽二

印刷者 山田 博

發行所 勁草書房

東京都文京區後樂二―二三―一五
電話東京八一四(六八六二)
振替東京一七五二五三
◎高見 順 一九七四
〇三九五―八三三八―一〇一八三六

* 本書の定價は外面に表示してあります。

高見順全集 第十八卷

編纂委員
川端康成
伊藤整
澁川驍
平野謙
中村眞一郎
小田切進

目次

反時代的考察	7
きのうきよう	35
青春のために	56
現実と現象について	93
エロスの招宴	102
泡言集	231
好き好き	241
わが冗舌	269
異性讀本	289
憂樂帳	339

ちよつと一服

くらしの中の美について

夕閑帖

ひとつの道

解説 安岡章太郎

解題

連載エッセイ集

反時代的考察

惡女禮讚

反時代的考察といふ、ニイチエもどきの、いかめしい題目が、私に與へられて、かういふ文章を書くことになつた。私は病氣のため、しばらく世間から離れてをつたので、何やらすね者の印象を世間に與へてゐるやうであるが、生憎と目下の私は、大いに世間の空氣を吸はうといふ俗氣たつぷり、何事に對しても色氣たつぷりといふところで、反時代的とは飛んでもない。反政治といふ態度は變らないが、世間に對しても、時代に對しても、人生に對しても、人間に對しても、だから大體何事に對しても強ひて背を向けようといふ氣持はない。

女性に對しても、反女性的でない證據には、この頃私の書いてゐるのが、なかなかのエロ小説（とは、私の友人の言つたことだが、さう言はれることに私はかならずしも反對しない）であることによつて明瞭である。エロ小説流行の終戦直後は、エロ排撃の小説を書いてゐた私なので、

「皮肉な出方をする」

と友人は言ふ。友人の意見によると、あれほど盛んだつたエロ小説も最近頃には飽かれて、すたれ氣味であるといふ。正にその時に當つて、よしそんならと、逆に私がエロ小説を書き出したといふのだが、それほど私はあまのじゃくでもない。

私にとつて、女は、いはば世界なのである。そして、さうだつたのである。大袈裟なことを言ふやうだが、私の信念として、さうだつたのである。女で思ひ出すが、花袋がまだ生きてゐた頃、私は彼が誰かに、

「女が描けない作家は、一人前の作家ではない」

と言つたといふことを聞いた。それを未だに忘れない。女が世界だといふことと、これは、ちよつと違ふけれど、これが忘れられない言葉になつてゐるといふことは、女が世界だと考へることと無縁ではない。花袋は自分が女が描けないものだから、自分へのいましめとしてそんなことを言つたのかと思つたこともある。しかし晩年の傑作『百夜』を讀むに及

んで、私は己れの淺見を恥ぢた。

武田麟太郎がまだ生きてゐた頃、誰かから、永井荷風が次のやうなことを何かの機會に、ふと洩らしたと聞かされて、參つたと言つてゐた。

「若い人たちの中で、武田麟太郎といふ人などは、まあ、女の描ける方だらうが、惜しいことに、一流の女を知らない」と、荷風は言つたといふのである。そんなことを言つた覚えはないと荷風が言ふのだつたら、荷風さんといふ人は、すぐ、そんな風に言ふのだなどと、へらず口を叩かず、深く撤回するのであるが、荷風の言といふところに、千鈞の重みがある。

若くして逝つた作家の井上立士、生きてゐたらと残念でならないこの男は、あるとき、私にかう言つた。僕らは、たとへば *à la carte* の皿のやうな、見ただけのものしか無い、そんな女しか知らない。次々に御馳走の出でくる *table d'hôte* のやうな女を知りたい。——私はこの言葉を、井上立士の許しを得て、『如何なる星の下に』のなかで使つた。一流の女とは *table d'hôte* の如き女のことであらうか。

ジムメルはそのゲーテ論の中で、あのさまざまの不朽の女性像を描いたゲーテが、實は女性通ではなかつたといふことを書いてゐる。それは彼がオッティリー・フォン・ボークウ

イシュを息子の嫁に選んだ事實だけを見ても、明らかである。ゲーテは、女といふものを知らなかつた。しかし、知つてゐた。『反時代的考察』のニーチエが、嘗つて戀愛關係を持つたことの無い事實は、周知の通りである。ニーチエも女性通ではなかつたけれど、女はしかし、知つてゐた。ラファエルはその美しい女性像のモデルを、一體どこから探つてくるのかと問はれたときに、自分はモデルから探つたのではなく、「自分の精神に生起する一種の理念」を使用したのだと言つたさうである。ニーチエも同様のことを言つてゐる。ゲーテも同様のことを晩年に告白してゐる。「女性に關する私の理念は、實在の現象から抽象されたのではなく、それは私に生れ着いたものであるか、或いは、理由は分らないが、私の心におのづから生起したものである」と。

女性通になることは無いのだ。女を知るためには、實際に知らなくてはならないといふことは無いのだ。だが、それはゲーテとかラファエルとかいつた人々にのみ言へることかもしれないのであつて、私たちにとつては、やつぱり女を、——一流の女を實際に知ること大切だと思ふ。實際に知らなくても、知ることできる（ニーチエの言ふ）『ディオニソス的な天賦』をたとへ私たちも持つてゐたとしても、やつぱり實物に當るに越したことはないだらう。

それは、女をうまく描く爲に、大切なのであるか。女は世

界だからである。

ジムメルは言つてゐる。「……彼（ゲーテ）が常に女性を非難して、『何等理念に堪へる能力がない』と言ひ、それと同時に女性の人物においてのみ理念を盛ることが出来、女性はその理想を鑄込み得る『唯一の容器』であると言つたとしても、それは決して矛盾ではないのである。女性が何等の理念をも持つてゐないといふ事は、女性がゲーテにとつて理念である、といふ事を妨げない」——ゲーテを引き合ひに出すのは、いかにも面映いことではあるが、私が女は世界であると思ふのも、かういふ意味である。そこで一流の女とはどういふ女かを考へてみたいのである。

『藝術新潮』五月號の、モダン・フォトグラフィの解説で、瀧口修造がジャン・ジロドウの言葉を引用してゐた。それはかういふのであつた。「男は女といふものは前しか見ないと思ひ込んで、八字ひげやらカラーやらで飾つてゐるが、實は女はそれに氣を取られた振りをしながら、男の背中を盗み見してゐる。男の弱點がそこに丸見えだから」

これは男の心得違ひを指摘してゐるのであつて、女の本質といったものを指摘してゐるのではない。私は、さう思つた。このやうに常に男の弱點を見ようとしてゐる女もゐるだらうが、かういふ女は利口なやうでバカであり、不幸である。不

幸であるといふのは、女が女であることから逸れてゐるといふことで、女にとつてこれが最大の不幸である。

大體、女には、こんな風にこんなところにも出てゐるやうに男を憎む心が必ずあるもののやうだが、男性憎惡といふものを女の本質と見るフロイド的な見方に私は同じ難い。女が男を憎むのは、女を愛さない男を憎むのだと私などは考へた

い。
女を愛さない男の背中を女は盗み見してゐる。さうしてさういふ女は男から愛されない。男から愛される女は、男からだまされたがつてゐる女なのだ。愛されたがつてゐるといふより、はつきり、だまされたがつてゐるといふ方がいゝやうだ。女を侮辱してゐるのではない。男だつて、女にだまされたがつてゐるのであり、女にだまされることが男の幸福といふものなのだ。だます、だまされるといふ言葉が氣に入らない人には、酔ふ酔はされるといふ言葉を持つてきてもいい。
酒の場合にしても、酔ふまい、酔つてはならないとして、酒を殺して飲むのは、酒を利用して商取引きをしてゐる下劣な手合ひのすることだ。酔はなかつたら、酒の醍醐味は分らない。

男を酔はさない、男をだまさない女は、一品料理の如くつまらない。私は惡女といふことを考へてゐるのである。一流の女とは惡女のことだと考へるのである。女には誰でも惡女

の要素はあるけれど、なかなかもつて悪女たり得ないのは、「ディオニソス的な天賦」を男が多少持つてゐたとしても、なかなか、女を知ることが困難なのと同様である。

私のごく親しい人に、悪女か悪女的な女にしか惚れないといふ男がある。いや、惚れた女を、きまつて、悪女にすると云つた方が正確だ。つまらないやうな女が、その男にかかると、忽ちのうちに、素晴らしい女に仕立てられる。あたかも腕のいいコックが、つまらない材料から素晴らしい料理を作り出すのに似てゐるのだが、それとまた違ふのは、自分の作り出した女に、その男が、ぎゆうぎゆうの目に會はされることである。そしてその女は男に七顛八倒の苦しみを與へたのち、颯爽として、——左様、巢立つて行く。

私は彼に同情しないことにしてゐる。男にだまされたといふ後味の悪さなしに、女を自分から飛び立たせる、さういふ男は、もつとも達者な女蕩しだといふ風にも考へられるから、私が彼に同情しないのではない。女の方のことが、私には氣になるからだ。悪女にされた女はたまらない。さう思ふからだつた。さう思つて見てゐると、よくしたもので、悪女にされた筈の女が、他の男と戀愛してゐるうちに、悪女でなくなるではないか。悪女にはなかなかないものだといふことを知らされるのである。

悪女好みの男と戀愛してゐる間だけ、悪女的だつたのだ。言ひかへると、その女にとつて、悪女的であること、悪女の喜びを味はふことが、その男との戀愛だつたのだ。すなはち女は誰でも悪女的な要素を持つてゐると知らされるのであるが、同時に、悪女を知るといふことは、悪女にうまぐめり合へるかどうかといふことではないと知らされるのである。一流の女を知る知らないといふことも、同様の事情だと考へられるのである。

私は若いとき、マックス・シェーラーに夢中だつた頃があつて、何かといふとシェーラーを持ち出した。特に愛（*Love*）についてのシェーラーの研究から、その頃、私は自分の書くものに随分と借用（或いは悪用）させて貰つた。そのひとつに、かういふのがあつた。対象に價值あるが故に、私たちは対象を愛するのではなくて、逆に対象を愛するときに、対象における價值が高められる。價值がそこに創り出されると、シェーラーは言ふのである。

若い時分の、いはば觀念好み、抽象好みだつた私は、價值といふ言葉に心を惹かれた。その價值といふのは、美と崇高に通じてゐた。愛の崇高な美しさといふことが、若い私の心をとらへてゐた。愛は、しかし、必ずしも美しいとはかぎらない。いや、美しいのだが、美しいだけではない。それは、人生は美しいのだが、美しいだけではないのと同じだ。美し

いだけではないが、しかし、人生は美しいのである。

私が悪女といふものを一流と考へるのも、その意味である。悪女は、美しいだけではないが、悪女ほど美しいものは無い。(言ふまでもないが、この美しいは、美貌の意味ではない)特に悪女が、愛する男に向つて、その怒りをあらはに示したときほど、美しいものは無い。つまらない女が男を怨んだりするのは、なんともあはれで、貧しくて、やり切れたものではない。

私は近頃、倉田百三の著書を読んで、いろいろと教へられるところが多かつた。そのうちのひとつを、ここに言ふと、倉田百三の求道といふものを知る上に重要な文章である『生活と一枚の宗教』のなかで、自分が本當に正しいか正しくないかと言ふ事を問題としながら、さうして一方で生きる事に強い人、生きる事に熱心な人、その二つの原動力があるならば、「必ずその生活は宗教といふものによつて行かなければなりません」と言つてゐる。これは倉田百三自身のことをも言つてゐるのだ。では、「生きる事に強い人、生きる事に熱心な人」とはどういふ人かといふと、彼は自分のことを「非常に慾望の多い人間」と言ひ「諦めが悪い」「色々なものが欲しい。さうしてさういふものは何んでも心を引かれて色々なものを求め」る、さういふ人間だと言ふのだが、これが、

つまりさうである。生きること、そんな風に熱心な人間が、そして一方で「自分は兎に角、正しく生きたい、良い人間に成りたいと言ふ、自分の爲すことは正しくないかと言ふ事を問題とする心」から終始離れられない。さうした倉田百三のうちに、私たちは宗教的人間といふものの鮮やかな姿を見るのである。

私が彼の著書を今頃になつて読み出したのは、彼と同じ神經症(彼の言ふ「強迫観念」)に私も去年ひどく苦しめられたとき、龜井勝一郎から、倉田百三の闘病記を讀めとすすめられたのが、機縁であつた。大正の、あれは何年だつたか、倉田百三の『出家とその弟子』が出版されて、洛陽の紙價を高からしめたとき、私は中學生で、私もその愛讀者だつた。ベスト・セラーの評判に惹かれて讀んだといふだけではなかつた。私が文學に近づいたのは、一種の求道精神めいたものからだつたといふことは、既に私も幾度か書いてゐること、さうした私は倉田百三の熱烈な愛讀者だつたのである。だから、私は倉田百三と全く無縁だつたといふのではないのだが、いつか離れて行つたのである。私の求道精神めいたものが、やがて私を文學からマルクス主義へと近づけたことも、その一因だが、既にその前、『文藝春秋』の創刊間もない頃に、倉田百三は偽善者だといふ猛烈な攻撃が同誌に出て、單純な年少の私は、倉田百三に幻滅を感じたのであつた。偽善者だ

といふ攻撃は、倉田百三が求道のなんのと敬虔を、装ひながら女にうつつを抜かしてゐる醜態は許せないといふのであつた。

「正しく生きたい」と終始願ひながら、その一方「非常に慾望の多い」「諦めが悪い」人間であることのその相剋に苦しむ、さういふ苦しみの深さのうちに、求道といふものが深められる、そのところを私は知らなかつた。

人一倍慾望が強く、諦めが悪いことが、逆に求道の心を強めるといふことを知らなかつたから、私は倉田百三の醜態に、ただもう裏切られ、だまされたやうな氣持を抱いたのだ。

求道精神乃至は宗教的精神といふものは、弱々しい諦めや無氣力な厭世、生活意慾の衰弱萎枯などのうちにあるのではないといふことを、私は倉田百三に、およそ三十年の年月をへだてて再び會つたことによつて、はつきりと知らされた。宗教的人間とは、通常の人間よりもむしろ強い慾望を持ちながら、しかも正しく生きたいと強く苦しむ、さうした強い精神の持ち主のことである。

私は四十歳になつて詩を書き出し、そして數年ののち、詩とは若い頃考へてゐたのとは違つて、極めて強い精神を必要とするものだと分つた。詩的精神とは實に強い精神でなくてはならないのだといふことを考へてゐた矢先だつたせゐもあらうか、宗教的精神とは、人生や人間から逃げるのでなく、

人間と人生を強く生きて行く精神なのだといふことに、私は深い感動を與へられた。

女の話の途中で、求道だ宗教的人間だなどと言ひ出したのは、唐突の感から免れない。

私は、しかし、人生に對して「非常に慾望の強い」そして男といふものに對して「諦めが悪い」惡女といふものを考へてゐたのだ。「生きることに強い」「生きる事に熱心な」惡女が、とことんまで男といふものを知らうとするその強い精神、一種の求道精神にも似たその戀愛精神といふものを考へるのである。原子爆弾だなんだといふ、この險惡な時代にこんなことを言ふのは、やつぱり反時代的考察の類ひであらうか。

言海禮讚

「惡女禮讚」を書いて私は北海道の旅に出た。中野好夫、伊藤整、桶谷繁雄、清水崑の諸氏と、講演をして廻つたのである。その旅から歸ると、拙稿の掲載された『新潮』が私の家に届いてゐたので、これを開いて見たところが、拙稿の次の頁に「立身出世の復活——戒能通孝」とあつて、私は、ほほうと呟いた。北海道で、私は「出世」といふことについて話

をして來たのであつた。

今月は悪女禮讃につづいてパンパン禮讃と行かうかと私は思つてゐた。パンパン禮讃は、しかし、パンパン排撃が流行してゐる折柄、また私のあまのじやくと解されがちかもしれない故、二號禮讃と行かうかと、さうも思つてゐた。その矢先、「立身出世の復活」といふ題名を見た。私は、そこで私も「出世」のことを書かうと思つた。そして書かうと思ふのである。君子の豹變と言ひたいところだが、なに、ほんととは、北海道の講演材料に尾鰭をつけて、今月は、——暑くて臆劫だから、それでお茶を濁さうといふ算段である。

私は北海道で辭書の話をした。そして日本語の辭書では『言海』が私は最も好きだといふ話をした。どう好きかといふと、——私の愛用してゐる『言海』は、私が小學生のとき、何かの御褒美に保護者會から頂いた明治十八年版のものが、たとへば、「鼻」といふ字を引いてみると、かう出てゐるのである。

はな(名)鼻(端の義)顔ノ中央ニ高クナレル所、二孔ニ成リテ、嗅グヲ、及び、呼吸ヲ司ル。

また、たとへば「川」を引くと、

かは(名)川河(流レテ變ル義カト云)陸上ノ長ク凹ミタル處ニ、水ノ大ニ流ルルモノ。

このユーモア。この輕妙、この警拔。私が『言海』を愛し

てやまないのは、このためである。

眞實を言ふといふことは、實は、このやうに、必ず滑稽味を帯びざるを得ないのだといふことを、これは私たちに知らせてくれる。眞實がそもそも、ユーモアのあるものなのかもしれない。

「鼻」とは何か。「顔ノ中央ニ高クナレル所」とは、なんとも、はや、ユーモアどころか、人を馬鹿にしたやうな話だが、しかしそれが、うそいつはりの無い眞實なのである。鼻とは、顔以外のところで高くなつてゐるものではなく、また、顔の中央以外のところで高くなつてゐるものでもなく、やはり顔ノ中央ニ高クナレル所なのである。

水ノ大ニ流ルルモノも噴飯ものだが、「大ニ」を省いたら「川」ではない。陸上ノ長ク凹ミタル處ニ水ノ流ルルモノでは、溝になつてしまふから、やはり「大ニ」流れねばならぬ。それもまた、陸上ノ凹ミタル處ではなく、陸上ノ長ク凹ミタル處ニ流れねばならぬとすると、この語釋は、實に一字といへども抜きさしならぬものだといふことが分る。まことに簡にして要を得たる名文章とせねばならぬ。

『言海』のかうした語釋のうち、傑作として私の推奨致したいのは、「猫」である。「猫」のことを『言海』の大槻文彦先生は、どのやうに書いてゐるか。——この「猫」の語釋は、私がそれを演壇で披露することに、満堂の爆笑が常にあつた

も爆風のごとくに私を顛倒させさうになつたものである。またま、同行の中野好夫氏が私の講演のこの部分だけを聞いた晩があつたが、この部分だけでは、私が何やら大槻文彦先生を笑ひものにしてゐる感から免れない。中野好夫氏はその夜、苦虫を噛みつぶしたやうな顔で、

「あの、君の『言海』のあれ、大槻文彦、——あれは、僕の家内のお祖父さんなんだ」

「え？」と私は言つた。

「僕の家内は、その大槻文彦な、あれの孫や」

私は、私が氏に與へた誤解を解くためにも、この一文を草さねばならなかつたのである。中野氏の奥さんのお祖父さんは、「猫」のことを、どう書いたか。

ねこ（名）猫（ねこまノ下略、寐高麗ノ義ナドニテ、韓國渡來ノモノカ、上略シテ、こまトイヒシガ如シ、或云、寐子ノ義、まハ助語ナリト、或ハ如虎ノ音轉ナドイフハ、アラジ）古ク、ネコマ、人家ニ畜フ小サキ獸、人ノ知ル所ナリ、溫柔ニシテ馴レ易ク、又能ク鼠ヲ捕フレバ畜フ、然レドモ、竊盜ノ性アリ、形、虎ニ似テ、二尺ニ足ラズ、性、睡リヲ好ミ、寒ヲ畏ル、毛色、白、黒、黃、駁等種々ナリ、其睛、朝ハ圓ク、次第ニ縮ミテ、正午ハ針ノ如ク、午後復タ次第ニヒロガリテ、晚ハ再ビ玉ノ如シ、陰處ニテハ常ニ圓シ。

大槻先生は猫嫌ひでもあつたのだらうか。猫好きの私には「然レドモ竊盜ノ性アリ」は大いに不服なのであるが、「形、虎ニ似テ一尺ニ足ラズ」と言ひ「晚ハ再ビ玉ノ如シ」と言ふあたりは、その絶妙、ただただ感嘆のほかはないのである。（然レドモ竊盜ノ性アリ）は、愛猫家から抗議でも出たのか、昭和版の『大言海』を見ると、この句は、——他はそのまま、この句だけが削除されてゐる。）近年に出たある辭書（また、友人の誰かの何かに當つてゐたりすると工合が悪いから、その名を祕す）で、「猫」を引くと、その語釋は『言海』のそれとは比べものにならないつまらなさである。そしてそのつまらなさは、その辭書だけのことでなく、この頃の辭書は總じて同じやうなつまらなさである。

ねこ（猫）（名）食肉目猫科の哺乳動物。頭圓く尾は短く、體軀狹長、屈伸自在で、柔毛密生し、瞳は夜間大、晝は豎針狀。趾に鉤爪を有する。色は白・黒・三毛等種々ある。

大槻先生は、犬好きであつたのだらうか。犬に對しては頗る好意ある語釋を施してゐる。

いぬ（名）犬（家ニ畜フ獸ノ名、人ノ善ク知ル所ナリ、最モ人ニ馴レ易ク、伶俐ニシテ、愛情アリ、走ルコト速ク、狩ニ用半、夜ヲ守ラスルナド、用、少カラズ、種類、多ク、近年、舶來ノ種アリテ、愈、一ナラズ。